和　算

第　13　号

昭和51年6月　1日印刷
昭和51年6月10日発行

発　行　所
日本数学史学会近畿支部
〒530　大阪市北区常安町26　日立造船会館内
郵便振替口座　大阪317234
発行者　桑原秀夫・　編集者　西谷治三郎
印刷者　大阪市北区朝日町9　三　友　社

関孝和の肖像画再発見

田　中　延　佳

桑原秀夫先生が、かねて福井市の脇田家に関孝和の肖像画のあることを調査しておられたところ、最近それが発見された連絡を受け近畿支部会員で急きよ、3月21日福井市へ行くことに決定した。

当日は大阪から桑原秀夫・竹本十吉・金子良夫・多田寿雄・清水布夫・東京から下平和夫の6氏と小生の7名が参加、大阪発10時20分、福井着12時34分の「白鳥」に乗車する。

お彼岸というのに冬型の気候に逆戻り、湖北では時ならぬ春の雪で野山もまっ白である。福井駅にはやや遅れて12時40分着。駅にはすでに、下平先生、本日の情報をお知らせいただいた北瀬芳正氏、南越文化財研究協議会の斉藤優氏がお揃いで私達を迎えてくださった。早々に3階にあるレストランで北瀬氏の御好意により昼食を共にしながら本日のコースについて打合せをする。

駅前より車2台に分乗、まず本日の主目的の脇田家に向う。福井大学の近くにある同家についたのはボタン雪の降りしきる2時過ぎであった。

早速通された2階には、すでに床間に関孝和の肖像が、表装も、ま新らしくかざられている。「関孝和全集」の口絵、日本学士院蔵の写真の原本が、彩色で眼前にかけられているのである。過去幾多の和算研究家もほとんど現物を見たこともない肖像画である。これだけで福井に来てよかったと思う。

画紙の寸法は、縦103㎝、横32㎝、軸の長さ185㎝、巾43㎝で、下方に肖像画上方に日下開算　関新助孝和　先生之像と縦に3行で書かれている。

箱のふた裏には、正四位関藤原孝和先生像并法名　鯖江藩中斉藤茂

箱の、み、裏には、　鯖江藩中
天保八年　画益子勘左衛門氏魯山
関新助先生之像　書間部勘十郎氏混斉
斉藤金吾元厚字龍泉

そして箱の中には半紙に

関新助孝和
正四位　宝永五戌子歳
法行院殿　宗達日心大居士
十月廿四日
藤田権平貞資

永井信濃守殿仕彦太夫
久留米候に仕而権平ト改
隠居改退道
八木林平　質
跡部式部殿知行所上別那波郡
都村ノ産幸助久留米候仕而改林平
後落合郷八殿に仕而孫兵衛

と書かれてあった。

御当主、脇田博氏の母堂富子刀自は斉藤茂氏の次女で、存命中、「うちの御先祖様には立派な数学者がおられた」と常々話しておられたそうである。

そこで、この肖像画がなぜ福井の鯖江藩中にあるのか、私個人の考察では

関孝和は延宝6年(1678)甲府宰相徳川綱重の没後、その子綱豊につかえ、勘定吟味役になった。宝永元年12月綱豊、5代将軍綱吉の世子となって、西之丸に入るや孝和もそれに従い、幕府直属の士になり、御納戸組頭を勤め、御蔵米二百五十俵および、十人扶持を給せられた。後に三百俵に加増、宝永3年小普請役となり、宝永5年（1708）10月24日病没している。（平山先生著「関孝和」より）

鯖江市史編纂室の主事竹内信夫氏よりいただいた、「鯖江歴史年表」によると、鯖江藩主は

寛文6年（1666）5月間部家祖越前守詮房武蔵忍に生まる。（関孝和より20数年後）

貞亨元年（1684）真鍋詮房、甲府綱豊の近習となり、真鍋を間部と改名（18才）

元録12年（1699）甲府黄門綱豊につかえて用人に昇任（33才）

宝永元年（1704）従五位下越前守に任ぜらる。

（38才）（五代将軍綱吉より）

宝永3年（1706）1月、若年寄格に進み相州にて一万石を領す。12月従四位下に叙せられ老中の次席となる。（40才）

宝永4年（1707）7月一万石加増さる（41才）。

宝永5年（1708）4月詮言を養嗣とする　（関孝和没）。

宝永6年（1709）綱豊　6代将軍家宣となる。

同年詮房老中格三万石となる。

宝永7年（1710）上州高崎城主となり五万石を領す。

正徳2年（1712）10月将軍家継の輔佐となる。

亨保2年（1717）2月越後村上へ移封さる。

亨保5年（1720）7月村上居城にて逝く54才。

同年9月詮言家督を相続、村上より西鯖江へ移封命ぜらる。

以上のように鯖江藩主間部詮房が18才で甲府宰相綱豊につかえてより、関孝和が逝くまでの24年間に同じ主君につかえていたことになる。この時代に関孝和の肖像画を詮房が入手し、代々間部藩主の受継ぐところとなり天保時代にこれを何等かの参考としたのではなかろうかと推察される。

又日下開算の文字も　数学者であったために開山を開算としたのであろうか。

何はともあれ、肖像画が福井の震災と水害をまぬがれて脇田家にあることが確認され、大切に保存されていることは、まことに喜ばしいことであった。

私達のために快く肖像画を公開、写真撮影までも許可くださった脇田博氏に厚く御礼申し上げます。

次いで、益子魯山、間部混斉、斉藤金吾について調査のため、鯖江市役所をたずねる。日曜日にもかかわらず、竹内氏をわずらわし古地図や、市史をいろいろと調べていただいたが詳細はほとんど不明であった。益子魯山については万延元年52才で没したことが判明した。お手数をかけ厚く御礼申し上げます。

次は鯖江市舟津町舟津神社の神楽殿にある算額を見学する。それは神社の鳥居から日野山を測量する問題で、安政2年8月竹内重規が奉納したものであるが、風化が激しくほとんど読むことができなかった。

斉藤先生のご案内で、最後にもう一面神明町神明社にある算額を見に行く。来客中の瓜生宮司をわずらわし拝殿の施錠をあけていただき、文政7年9月上河端村の辻本長兵衛が奉納した算額を見学する。そのあと、昭和44年12月文部省より重要文化財に指定されている瓜生家の古い住宅を宮司のご案内で元禄時代の地方色豊かな内部構造等を説明いただいた。ご多忙中をありがとうございました。

今日は一日中いろいろとお世話くださった斉藤先生には厚く御礼申し上げ、神明社でお別れする。

福井駅に着いたのは6時過ぎであった。斉藤先生のお話によると、鯖江、武生方面で約20面の算額があるとのことで、ある所にはあるものだと感心させられる。是非これを見学に再び訪れたいと思いつつ19時4分発の雷鳥に乗り福井を後にした。

末筆ながら、北瀬氏には終始なにかとお心づかいにあずかり、心より厚く御礼申し上げます。　（運営委員）

元禄14年の算額

田　中　延　佳

関孝和の肖像画を見て、その印象がまだ消えないうちに、武生市に元禄14年の算額があると言う知らせを、桑原先生より受ける。

早速、4月4日山田悦郎氏と3人で再び福井方面に行く手はずを整え、大阪7時35分発の北越2号に乗車する。2週間前の雪景色に替わって、春らしいびわ湖の風景が目に入る。3人で行を共にするのは、毛利重能の顕

彰碑建立のことで東京へ行った時以来で久しぶりのように思う。

９時３９分武生に到着、かねて電話で連絡してあったので、丹生高校の佐々木英治先生とは、初対面ながらすぐにお会いすることができた。簡単な挨拶の後、駅前で小休止する。

元禄１４年の算額は、佐々木先生も１０年前に調査に行かれたが、本殿は施錠してあり見せてもらえなかったそうである。その当時武生商業高校の先生で、数学研究部活動の一環として、丹南地方に現存する算額のみならず和算家、石碑、墓、和算書、写本その他郷土数学に関した調査をされ、現存算額を一堂に集めて展示されたそうである。その時のカラー写真を見せていただき、極彩色の美しい算額の多いのに驚歎する。

小憩後佐々木先生の運転と、ご案内で待望の武生市国兼町にある大塩八幡宮に向かう。途中杉浦茂氏（武生市文化財保護委員）も同伴していただき現地についたのは１０時４０分であった。

本殿まで百数十段以上もあろうと思われる石段がまっすぐに並び、その両側には老杉が亭々と立ち並び、八幡宮の歴史の古さを偲ばせる静かな神域である。

本殿には社務所から人が来て、カギをあけて待っていてくださった。早速、杉浦氏の案内で中で入り、「これが元禄１４年の算額ですよ」と指示される。はやる心を押えて、じっと目を凝らす。２７５年の歳月を経たその表面は、部分的に絵具がはがれて薄暗い本殿の中では判然としないので、杉浦氏のご好意で静かに額を外に運び出し日当たりを避けて本殿の前に立てかける。

算額の大きさは、縦７０㎝、横117.5㎝で左右の枠はあるが、上下の枠は破損して無く額面の下地の白い絵具がボロボロとおちる状態である。

内容は、右側に鶴が二羽、松の木、左側に竹と波に亀の絵が描いてあり中央に問題、答術、年号、奉納者名が書いてある。

奉掛鶴亀松竹の□□算術の一問

以下、桑原・佐々木両先生と判読したが、今となっては完全に読み取ることは不可能である。最後の元禄１４年辛巳八月十五日

蜂屋氏頼哉

とはっきりと読み取れたのは、せめてもの幸いであった。

元禄１４年といえば、現存古算額中、八坂神社（元禄４年）に次いで３番目になり、しかも、ほかに見られない彩色で問題に関係した絵画が、描かれている貴重なものである。

余談になるが、同年には赤穂城主浅野長矩が切腹、改易され、翌年大石良雄等が吉良義央を討ち、主君の仇討をしている。このような時代に、雪深い北陸、丹南地方で、コツコツと数学の勉強をしていた人びとが居たのである。この額は四、五年前に杉浦氏が発見され、同氏の推薦により現在、市の文化財となっているそうである。今この絵馬が算額として日の目を見ることになったのである。杉浦氏及び社務所の方には、お世話になった御礼と、算額の保存をお願いして社前でお別れする。

ふと時計を見ると１２時を過ぎている。佐々木先生のお誘いに甘えて朝日町のお宅を訪問する。同家は豊臣時代から続いた立派な家柄である。奥様のお心づくしの料理をちょうだいし、食後、先生が１０年前より算額、和算関係の調査、研究された成果及び資料の数々を見せていただき大いに感服する。丹南地方の文化財としてではなく、広く世間に紹介するため、早い機会にぜひ日本数学史学会に発表されるように三人でおすすめした。

話は、なかなか尽きないが、一面でも多くの算額を見たいので、宅から庭つづきのすぐ裏山にある朝日観音堂に行く。文化４年の秋桃田其治が奉納したもので山口和の道中日記にも記載されている。

山口和が文政４年１０月初めから１ケ月間丹生郡西田中村（現朝日町）桃井小八郎宅（現存している）に逗留した時に見た額を155年後の今、この目で確認したのである。ほかにもう一面、明治１２年１月、同町内郡村の竹内与三左ェ門が奉納したものがあり、二面共観音堂の外側にかかっている。

佐々木先生がたまたま、この二面の算額に気づかれてから和算に関心を持ち、調査、研究される動機となったいわれのある算額である。

下山してから、何千本という「しゃくなげ」が広い家敷内に栽培されているのを見せていただきびっくりする。今年は寒さで開花が遅れているとのこと、それでもときどき美しい花をつけている枝を見かける。その他にも桃、らん等たくさん栽培されていて、実にのどかなひとときであった。

奥様に厚く御礼を申しのべて佐々木家を後にし、鯖江市中野町、中野神社に向かう。途中、斉藤優先生のお宅に立ち寄り、再び先生を煩わして同行をお願いし拝殿を開けてもらう。ここには、慶応４年４月、樋口村の飯田市左ェ門奉納の一面だけであるが、問題にちなんだ美しい絵が描かれている。

掃き清められた参道を降りて今立町朽飯の八幡神社に向う。途中斉藤先生をお送りしてお別れする。再度ありがとうございました。

八幡神社では宮司みずから拝殿を開けてくださった。ここでは拝殿の外側に嘉永２年東淵月輪負士門人、市橋鶴松負澄奉納と、拝殿内に、天保４年８月、落井村の金粕久美門人江尻秀重奉納および、明治３年８月東秀重門人民清久奉納の３面がのこされている。この後宮司のご案内で宝物殿の仏像や木製の狛犬その他の貴重な品々を見せていただき厚く御礼申し上げます。

次いで、今立町寺地の刀那神社に行く。急な石段を手摺にすがりながら上がると、正面にガラス張の拝殿があり、施錠してあるので中に入ることはできなかったが、窓から二面の算額を確認した。ひとつは弘化２年３月に

寺地村の神主、金柏久美門人平親王相馬将門苗裔、伊左ェ門全盛が奉納したもので、他の一面は全盛の子息、服部暁峯門人相馬貫一暁斉が、明治２０年７月２０日に奉納したものである。

午後５時下山して武生駅に向う。途中武生商業高校に立ち寄る。

佐々木先生が１０年前に、生徒達と共に苦労して作られた、現寸大の現存算額１８面の複製と、写本から復元された１面とが、３階の廊下に展示されていて、丹南地方の算額が一目で見られるのである。

素材はベニヤ板ではあるが額縁になっており、しかも彩色で原画に近い絵までが、描かれているりっぱな作品である。クラブ活動の一環として、先生と生徒が協力してこれだけの作品を残した学校は他には見聞したこともなく頭の下がる思いであった。

５時４０分武生駅に到着。佐々木先生を囲んで夕食を共にし、今日の美しくてすばらしい９面の算額を見せていただいたこと、又今後の研究課題等楽しいだんらんのひとときを過ごし、再会を約して６時４７分発に乗車帰阪した。

佐々木先生には一日中、自家用車の運転からご案内までお願いし、末筆ながら感謝申し上げると共に心より厚く御礼申し上げます。

尚、文中各所で、先生よりいただいた冊子「福井県の算額　　丹南地方」を引用させてもらったことを附記しておきます。（運営委員）

＜随想＞　　感激したこと ―

松田少尉殿との再会

西　谷　治三郎

４月１７日（土）、午後１時から日本数学史学会の友好団体「船場の会」（横山三郎）主催による文化講演会が大阪市立集英小学校で開かれた。講演会の演題は「南蛮文化と大阪」、講師は南蛮貿易史の権威、京都外国語大学教授、文学博士松田毅一先生である。

私にとって講演も興味あるものだが、それよりも中支従軍当時の松田少尉殿に再会するのが主目的である。当日早いめに学校を出て１２時４０分頃、会場校の講師控室に充てられていた校長室へ飛び込んだ。「失礼ですが本日の講師の松田先生でございますか。ご機嫌よろしうございます。自分は中支で少尉殿の当番兵をしていました西谷です」「あゝあのソロバンの西谷 ―― 」ふたりともアトの言葉が出ず無言のうちに互い固い握手を交した。３０年ぶりの再会である。少尉と一等兵、現在は大学教授の博士と高校教員。感激あるのみ。同席の松田教授夫人や芥子集英小学校長も「奇縁ですなあ。良かったですね」と言って下さった。文化講演会開始の午後１時までに残り時間が少なく、お互いに５分ずつぐらい大急ぎで現況を話しただけで私は校長室を辞去し講演会場へ急ぐ。当日は大阪珠算協会の役員評議員会があり午後３時講演の途中で残念ながら集英小学校を後にして大阪商工会議所へ急いだ。

思い起こせば小生、昭和１９年９月現役入営、２０年１月上海（シャンハイ）に到着。この当時松田見習士官殿が少尉に任官され小生が初代当番兵となる。軍隊生活は辛いこともあった筈だが幸運にも生きて帰った者としてはそれらはすべて忘却。衣食住の最低保証は有難いが、いつ命が無くなるか明日のことはわからない。戦友は演習をしているのに将校当番は公用腕章をつけて松田少尉殿と二人で上海の郊外へ行き、松田少尉ご友人の私宅で（東亜同文書院大学の教授？）腹一杯銀メシと珍しいご馳走に預かった記憶がある。松田少尉は、軍務の時間はきびしい上官だが夕食後は将校室へ呼ばれ、肩書ぬきで少尉殿から上智大学時代の話を伺い、私も調子に乗ってソロバン談義をやったり珠算式暗算の実演をしたものだ。２０年６月頃、緊急転属命令がでてお互いに挨拶らしい言葉も交さず別れ別れとなってしまった。

中支での敗戦後、小生は部隊経理部に所属し記帖や計算をやるかたわら、南京（ナンキン）・上海周辺の警備にあたっていたが、21年３月、上海から乗船、無事復員。帰阪後松田少尉殿（在東京）から２，３回お手紙を貰ったが戦後の困難な諸事情のため返事も出さず失礼し今日に至ったのである。

昭和３５年頃であったか、本屋の書棚で松田毅一著作の書物を見つける。永年さがしていた懐しい名前である。奥附を開くと清泉女子大学教授であり、わが国でも数少ない南蛮貿易史関係の権威者で斯界の第一人者として活躍しておられることがわかった。教授は、１９５９年イスパニアのナヴァラ大学に客員教授として招かれ、キリスト教史学会常任理事、ポルトガル海外領土史研究所員、国立横浜大学講師歴任。主要著書に「在南欧日本関係文書探訪録」「日葡交渉史」「キリシタン研究」「南蛮史料の発見」などがあり、ほかにかずかずの研究論文を発表、また各地の講演会講師として東奔西走、外遊、ラジオ・テレビに出演など研究活動に多忙を極めておられる。

昭和５１年４月１７日、船場の会が縁で30年ぶりに再会することができてたいへん嬉しく思っている。私のライフワークとしての珠算史・日本数学史を調べる過程で南蛮貿易に関する知識が必要である。今後は勉強の方面でご指導頂きたいと念じている。近日中にお宅へお伺いして３０年分の人生報告をし、研究についての松田教授のご高見を拝聴する予定である。　　（副支部長）

＜新　刊　紹　介＞

斉藤茂七・鈴木久男

「そろばん図絵」

55.5 ㎝×38.5 ㎝ 判。特漉和紙使用。

二重函・豪華装幀・オフセット４色美麗カラー印刷。全１４葉（各ケース入り）

定価￥28,000　〒101　東京都千代田区神田神保町２－２０　暁出版株式会社

◎五つの特色　　江戸時代のそろばん風俗と社会背景をカラー判により現代復元。一図絵ごとにそのまま額縁に使用が可能。時代考証を十分に考慮して彩色。現代の源流をなす江戸珠算を総覧するＢ５判４８頁の書き下ろし別冊解説。特漉和紙による美麗精緻なそろばん図絵。

◎全１４葉の内容　　①「算法便覧」より和算指導の図　②「万福塵劫記大全」より両替屋店頭の図　③「算法便覧」より両替屋店頭の図　④「万代塵劫記大成」よりそろばん指南の図　⑤「算法便覧」より和算入門の図　⑥「万徳塵劫記商売鑑」より米問屋の図　⑦「算法図解大全」より士の図　⑧「算法図解大全」より農の図　⑨「算法図解大全」より工の図　⑩「算法図解大全」より商の図　⑪「増補算法図解大全」より算法伝授の図　⑫「勘者御伽雙紙」より検算の図　⑬「香蝶楼国貞筆」による稚六芸ノ内書数　⑭「塵劫記」よりねずみ算の図。

「和算１４号」ご寄稿お願い

近畿支部の機関誌「和算」は年４回発行の方針で進めており、次号は９月１日発行予定です。研究論文、随想などをぜひご寄稿下さいますようお願いします。

（西谷治三郎）

別所やそじ・尼見清市著「むかしの堺」

〒593　堺市深井中町　堺市立深井小学校内はとぶえ会（振替口座大阪55342番）

定価￥５００　送料￥２００

本書は堺の歴史的な事件や史跡、社寺などをわかり易い文章、絵、写真などで説明、かつての堺を知るガイドブック。例えば一休和尚が堺の町と深い関係があった話、大阪・堺間の交通機関の発達で物資流通の中心が大阪に移ったこと、明治１４年、大阪府に合併されるまで堺県だったことなど興味深い内容。

安政二年刊「浪華の賑ひ」（復刻）

神戸市茸合区若葉通６－２－８（杉本ビル）中外書房　刊。（限定版）定価￥4.５００

明治２８年版「大阪けんぶつ」（復刻）

上記と同じ　（限定版）　定価￥2.５００

講談社＜現代新書＞

謝世 輝著「日本近代二百年の構造」

講談社　＜現代新書＞

西山松之助 編

「江戸三百年」（全三巻）

第１巻・天下の町人（開府～元録）

第２巻・江戸ッ子の生態（享保～化政）

第３巻・江戸から東京へ（天保～明治）